



城

第三十八回 広島城

～要地なればこそ起こる悲劇～

深草 祐一

広島市内で旅行者が訪れる所といえば、平和記念公園と原爆ドームが頭に浮かぶと思いますが、その北側のビル街の中に5層の天守閣が立派にそびえているのをご存知でしょうか。鉄筋コンクリート造りの復興天守ですが、古写真を元に外観復元されたもので、周囲には広大な内濠も保存されており、戦国末期の大規模な石垣による平城の見どころが詰まった全国有数の城址公園です。今回は広島城がたどってきた歴史についてご紹介したいと思います。

広島城の築城

現在の位置に広島城を築城したのは、戦国末期に中国地方の大部分を領国としていた毛利輝元てるもとです。毛利家を一代で中国地方の覇者へと押し上げた輝元の祖父・毛利元就もとなりは、山間部の小さな山城であった吉田郡山城から本拠を移すことをしませんでした。しかし、豊臣秀吉によって急速に天下統一が成し遂げられていく中、豊臣政権の五大老の一人となって京や大坂に上った輝元は、戦乱の時代の終焉と城下町整備の必要性を痛感します。そして、瀬戸内水運との接続が可能な安芸国中央部のデルタ地帯に、日本有数の大名たる毛利家の本城にふさわしい大規模な平城を築城し、本拠を移したのです。新たな本拠地の選定のため輝元がこの地域を検分した結果、「最も広い島地」に築城することに決めたといい、城が完成した頃に、毛利家祖先の大江広元の由来等々を考慮して「広島」と名付けたと言われています。

関ヶ原の戦いと戦後処分

名将言行録によれば、毛利元就もとなりは、有名な三本の矢の例えとともに息子達に対して、毛利本家たかもと(長男・隆元の子・輝元)、吉川家きつかわ(次男・元春)、小早川家こばやかわ(三男・隆景)の三家は仲良くしなければならぬと訓示し、特に孫の輝元てるもとに



広島地形と広島城の縄張り

対しては、吉川元春きつかわもとほる、小早川隆景こばやかわたかかげの二人の伯父に対して祖父元就と同じように接することと遺訓を残したといえます。かつてない勢いで世の中が変化していく中であって、毛利の両川と呼ばれた吉川元春きつかわもとほる、小早川隆景こばやかわたかかげが存命の間は、毛利家中は結束を固くして何とか領国と地位を保ち続けていました。しかし、この二人が亡くなった後に起こった関ヶ原の戦いの際、毛利輝元てるもとは石田三成いしだみつなりの檄に答えて西軍の総大将となるものの、大坂城から積極的に動かず、毛利家中の様々な思惑をまとめることができませんでした。そして、吉川広家は家康に密かに不戦を約束して毛利秀元率いる毛利本隊を南宮山に押しとどめ、小早川秀秋は土壇場で家康方へ寝返り、ただ一日の戦いによって徳川家康にはほぼ一方的な大勝利を収められる結果を招いてしまいます。戦後の家康からの沙汰は、吉川広家きつかわひろいえ、小早川秀秋こばやかわひであきは加増する一方、西軍総大将だった毛利輝元てるもとは全ての所領を没収するという厳しいものでした。それまで毛利本家のためと思って家康

との関係をつないできた吉川^{きつかわひろえ}広家は、この沙汰に狼狽し、必死に取り成します。その結果、吉川家に与えられる所領を毛利家に譲るという形で、何とか毛利本家を大名として存続させることが許されることとなったのです。そして、毛利^{てるもと}輝元は、120万余石、実質は200万石ともいわれた所領をわずか36万余石にまで大減封され、せっかく築いた広島城を退去して長門^{ながと}国(長州)・萩へと移って行きました。以来、毛利家中では、江戸の方向に足を向けて寝ていたといわれるほど徳川家に対する恨みを代々語り継いでいたといい、それが長年の時を隔てて幕末に爆発することになるのです。

江戸幕府初期の改易の嵐

毛利輝元を退去させた後の要地広島には、いち早く家康に味方したことで尾張・清洲24万石から安芸備後合わせて49万余石に大幅加増を受けた福島^{ふくしまさのり}正則が入ることになりました。ただ、福島^{ふくしまさのり}正則はもともと豊臣秀吉の子飼いの武将であり、徳川家にとっては外様の大名です。関ヶ原の折は、仲の悪かった石田^{いしだ}三成憎しの思いの強さから徳川家康に味方したようなものでした。豊臣政権^{まさのり}五大老筆頭としての徳川家康の人望と実力は認めていても、正則にとって主君はあくまでも豊臣秀吉の息子^{ひでより}秀頼^{ふくしまさのり}でした。福島^{ふくしまさのり}正則という武将は、少々直情傾向なところがありましたが戦にはめっぽう強い猛将であり、こういった危険な人物を、徳川家が放っておくはずがありませんでした。その後、正則は終始徳川家から警戒され続けます。そして、二代将軍徳川^{ひでただ}秀忠の時代に、広島城を幕府に無断で修築したこと等を咎められ、福島家は有無を言わず改易。信濃川中島4万5千石に大減封され、さらに嫡男の死後は2万5千石を返上することとなり、正則はさびしい晩年を送ることになりました。そして、正則^{まさのり}が没すると、全ての所領を没収。後に子息が3千余石で旗本に取り上げられはしたものの、大名家としての福島家は消滅したのです。

このように、江戸幕府初期の特に外様大名に対する警戒と処分は苛烈を極め、どのような有力大名家であっても、いつ何を咎められ、どのような処分が言い渡されるかわからない状況でした。それは、福島家の後に広島城に入った浅野家にとっても同様でした。浅野家は、豊臣秀吉の妻おねの縁者であることから秀吉の出世とともに立身した、これも徳川幕府においては外様の大名です。関ヶ原の折、福島^{ふくしまさのり}正則と同じく石田^{いしだ}三成と対立していた浅野^{あさの}長政は家康に与し、紀伊・和歌山37万余石を与えられました。その子・幸長^{ゆきなが}、長晟^{ながあきら}と継ぎ、福島家の改易にともなって安芸42万余石に移封され、広島城に入りました。そして、浅野^{あさの}長政が隠居料として賜った領地に端を発する分家が、かの忠臣蔵で有名な播磨・赤穂の浅野家です。江戸城松の廊下の人傷事件を起こした浅野^{あさの}内匠頭長矩が切腹を申し付けられた

際、広島^{あさの}の浅野家は終始赤穂藩から距離を置き、類が及ぶことを避けています。そして、浅野家は改易やお家断絶の悲劇に見舞われることなく、幕末まで広島藩主として存続することができたのです。

広島城天守の破壊

江戸時代が幕を下ろし、武士の世が去っても、広島城の天守閣は破却されることなく保存されることとなりました。明治新政府は、各地方に軍の拠点を置きましたが、そのうちの一つ中国鎮台府が広島城跡に置かれました。そして、日清戦争時には広島大本営が置かれ明治天皇が行幸なされるなど、その後、広島は軍の町として繁栄していくことになります。しかし、昭和に入り、太平洋戦争に突入すると、軍の町・広島は米軍の空襲に曝されます。そして、昭和20年8月6日。広島^{あさの}の中心部に向けて新型爆弾が投下され、それまで現存していた広島城天守閣は衝撃波を受けて倒壊しました。この時、敵の新型爆弾投下の第一報を送ったのは、広島城内に設置された中国軍管区司令部地下壕の指揮連絡室に詰めていた学徒動員の女学生だったということです。広島城の本丸内には、内濠の石垣に沿ってコンクリートで造られた旧防空作戦室が保存されています。

その後の広島城

戦後、高度成長期の日本では、各地で町のシンボルとして失われたお城の再建が行われました。広島城の天守閣も鉄筋コンクリート造りで再建されることになりましたが、戦時中まで現存していたことから写真が残されており、古い絵図等から想像するしかなかった他のお城とは違って、かなり正確に創建当時の外観が再現されました。毛利^{てるもと}輝元が意気揚々と築き上げた5層の大天守は、もう一度この世に形を与えられ、広島^{あさの}の街を見守っています。



広島城の天守 (出典：Wikimedia Commons)